

第六章 移植、そして死



■ 骨髄バンクへの検索依頼

由希子のドナー（骨髄液提供者）は、全米骨髄バンクの登録者の中にいたわけだが、検索を依頼してから移植当日に太平洋を越えて運ばれてくるまで、およそ十一カ月の出来事は、由希子自身には詳しく知らされていない。

親族にHLA適合者がいない由希子のような患者の場合、骨髄移植を受けるには非血縁者（他人）を頼るしかない。個人で探すとなれば、数千万円もの負担を強いられる。それで見つかればまだしも、日本でそうやってドナーを見いだせた例は皆無に近い。

白血球の血液型ともいえるHLAの適合率が、きわめて低いからだ。大ざっぱには数百分の一から数万分の一といわれる。そのため、HLA型のデータをあらかじめ蓄積しておく「骨髄バンク」の必要性が叫ばれ、イギリスをトップに欧米各国で続々と誕生したのである。

これに対して日本では、八九年十月に民間組織の東海骨髄バンク（名古屋市）がやっと出来上がり、厚生省主導による日本骨髄バンク（骨髄移植推進財団と日本赤十字社で構成）が産声を挙げたのは、ようやく九一年十二月のことであった。

日本骨髄バンクができるまでの過渡的措置ともいえる東海骨髄バンクは、九三年二月の五十五例目の移植を最後に、その先駆的役割を終えた。由希子のドナー探しの真っ最中は、両方の骨髄バンクがバトンタッチをする時期に当たるが、そのいずれにも、HLA適合者は結局いなかった。

由希子のHLAの特異性から、主治医の小寺良尚医師は、日本骨髄バンクの患者登録開始（九二年六月）を待たずに、全米骨髄バンク（NMDP || National Marrow Donor Program）へドナー検索を依頼した。成人式を控えて退院する直前の九二年一月十一日である。

二回目の入院をつづけている由希子は、薬による治療で血液のバランスがよくなってきたし、近く退院できる見通しは立っている。だが、いつまた急性転化するかわからない。そうなれば、仮にドナーが見つかったも、移植後の治療率は下がってしまう。体調のなるべくいいときに移植にこぎつけるにこしたことはない。早ければ早いほどいいのだ。

検索依頼だけなら、難しい問題は何もない。三次検査のために日本から検体を送るルートは、磯和夫が切り開いてくれていた。

日本での骨髄バンクの発足は遅れたが、HLAの適合率については欧米をはるかに

しのぐ。HLAは親から子、子から孫へと遺伝されるため、人種による偏りかたよが大きいため、混血の少ない日本人の適合率は、欧米の八〜十倍にも達するといわれる。

それに小寺医師は、由希子の移植を日本で実施する方針を固めていた。これを機に、ほかの患者にも適用できるようにしたかったのである。

NMDPのドナーからの骨髄液によって、アメリカで移植をする場合、二十二万ドル（一ドル百十円として二千四百二十万円）以上のデポジット（前払い）が必要になる。それを負担できる余裕が、すべての患者家族にはない。国民皆保険の日本では、はるかに安く移植が可能になる。それに由希子の両親も、日本での移植を望んだし、なによりも由希子自身が小寺医師に全幅の信頼を置いていた。

「どうしてもしようがないならアメリカにも行くけど、できれば小寺先生に移植をしてほしい」

日本で移植を実施する場合、ドナーがNMDPの登録者だと、移植病院自体がNMDPの認定病院でなければ、骨髄液を提供してもらえない。認定病院となるには、移植実施例、無菌室の数、医療スタッフの数、放射線科や栄養科との協力態勢など、必要な条件があるが、小寺医師には認定される自信が十分あった。そのころ日本には、

NMDPに認定された移植病院はゼロだった。

だから、由希子のドナー探しと、名古屋第一赤十字病院のNMDP認定手続きが、並行して進むことになる。

九二年三月二十日、二次検査までの適合ドナーがいるというファクスが入った。三次検査へ進むためには、必要経費を振り込むと同時に、検体（由希子の血液）を送らなければならない。三次検査はMLC（Mixed Lymphocyte Culture）、またはDNAタイピングによって、患者とドナーとのリンパ球の「相性」を確認する。由希子は、NMDPが全面採用に切り替えつつあったDNAタイピングで確認されることになった。

由希子の検体は四月六日に病院で採血され、磯和夫が開拓したルートどおりに、父が成田空港まで運搬した。

三次検査でも「適合」というファクスが届いたのは七月二十七日のことだった。ちょうど同じ日、「認定病院にはぼなりそうだ。残っている書類を至急送ってほしい」というファクスも入った。万事がうまく進んでいた。

一方、NMDPから骨髄液を運搬するためには、日本国内にコンタクト・パーソンを決めなければならない。これは医師ではなく、また、いつでも連絡がとれることと

いう条件がついていたので、東海骨髄バンク事務局員の小西朝子こにしあさこに白羽の矢が立った。朝子は看護婦資格も持っており、東海骨髄バンクの発足当初からずっと携わってきた人である。

朝子は九月三十日から一週間、NMDPのコーディネーター・トレーニングに参加するため渡米した。このトレーニングを経て、正式なコンタクト・パーソンとして認定されるのである。

こうして、由希子に必要な骨髄移植への準備が、着実に進んでいった。

■最後の入院

関係者が奔走しているころ、思いがけない事態がたてつづけに起きた。

NMDPでは、由希子の移植をシアトルのフレッド・ハッチンソン癌研究センターで実施するとはかり思い込んでいて、十月に無菌室を確保していたのである。

小寺医師は、名古屋第一赤十字病院が認定されしい日本でも実施するのだと伝え、その変更作業に追われた。最も心配されたのは「ドナーの心変わり」だった。移植病

院をいったんキャンセルした場合、往々にしてドナーが提供をことわることがあるのだ。

もう一つのアクシデントは、由希子自身の右の首筋に腫瘍しゅようができたことである。これは、白血球細胞がリンパ腺まで出てくる急性転化の前触れと考えられた。移植前に、腫瘍の治療を施さなくてはならなくなった。

九月二十四日の入院は、予定されていたものではなく、いわば緊急入院の様相が色濃かったのである。腫瘍が何を意味するのか、由希子への詳しい説明はなかった。

この日は、茂隆の就職試験の面接日でもある。

自宅の近くに、ヒマワリとコスモスが咲き乱れている畑があった。そこで、入院前最後の写真を撮って、茂隆と病院へ向かった。

「今まで、一次試験に合格すれば、二次試験で落ちることなんか滅多になかったみたいだよ」

「来年は名古屋で仕事ね。それまでには、わたしもきつと退院しているわ」

茂隆が名古屋に残ってくれるのは、本当に心強い。二十日の一次試験をパスしてから、同じ言葉を交わし合っていたが、何度でもかみしめたかったのだ。

茂隆は、ネクタイをしめ、元氣よく面接に出かけていった。

入院してすぐ、友人たちにハガキを出した。

《今は無菌病棟にいるんだけど、面会は出来ないの。調子は相変わらずだよ。移植は10月8日の予定だったんだけど、いろいろあって、やっぱり10月下旬ころです。来週は首にできたポツコリ（リンパ腺が腫れたようなモノ）を取る手術をするの。それが熱の出る原因か調べるらしいの。私、切って縫ったりしたことないので、怖い！ 麻酔がいちばん痛いのよね。とにかく頑張るわ。じゃあね♡》（9月26日、久保由紀子へ）

腫瘍の治療は十月一日におこなわれた。不安をまぎらわせるため、由希子はよくしゃべった。局所麻酔をかけられたあと、リンパ節の切除手術を受けた。

「怖かったわ」

看護婦にポツリとつぶやいたのだが、物心ついてから手術は初めてだったから、緊張感が解けて涙がにじんだ。

入院してから、茂隆は毎週土曜、日曜に見舞いにやって来た。平日の昼間は専門学校の授業があるし、夜は予習や復習をこなさなければならぬ。面会は午後七時までだったから、平日は無理だった。

面会こそ週末に限られたが、電話は毎日欠かさなかった。

十月九日には、入院以来初めて外泊が許された。二泊だけが、これが病院の外に出かける最後の機会になったのである。

一日目は、家族に茂隆を加えた五人が、東山スカイタワーで肉料理に舌つづみを打った。二日目は、テレビ局の取材を受けて過ごした。

《元気にしてる？ ちゃんとご飯食べてる？ 昨日は何してた？ 勉強してたんだろーね、きつと。私はちょっと体調が悪くて早く切ってごめんね。今日も朝は体調が悪くて寝てたけど今は大丈夫です。でも体調悪くても熱はないんだよ。外泊して、ご飯いっぱい食べたからかなー？

先週は私の所にずっと来てくれたので、勉強する時間がなくてごめんね。謝るならもう少し考えてくれても……と思ってるでしょうけど、私って心が狭いから……。私よりも、しーくんの方が忙しくて疲れているだろうなと思うと、申し訳ない気持ちだけど、私ってワガママだから。だって会いたいんだもん。我慢するなんて出来ない程会いたいんだもん。一日、しーくんに会わないだけで、すごい長いこと会ってないような気がする。しーくんは学校があつたりして時間が経つの早く感じるかも知れないけど、私はしーくんに亘る時間が来るのが楽しみなの。かわいい？

私が無菌室に入ったら、ほんの少しの文でいいから、お手紙書いて。誰よりもしーくんの言葉が今は欲しいから。

移植したら絶対治ると思う？ もしろん治す気で受けるけど、しーくんが「大丈夫」って言ってくれたらとても安心する。普段は「私、人にとやかく言われるの好きじゃないの」と言っていないながら、こんなことも言う私です。でも本当に一番頼りにしてるのはしーくんなの。

早く就職決まらないかな。今、一番心配なことは、悪いけど自分の骨髄移植についてだけど、二番目はしーくんの就職です。今でもやっぱり自分の方がしーくんの為がいいのかも……と思うけれど、遠くに行ってしまったらとても耐えられない。名古屋だって私にとっては遠く感じるのに……。なんて全くワガママな娘だよ。

でもね、治ったら更にワガママになるのではないかという心配は御無用だよ。私が治ったら今度はしーくんにいっぱいワガママ言わせてあげるからね。しーくんの勉強中にこんな長いお手紙を書いたら読むのに大変だよ。ということ、そろそろ終わりますよ。オヤスマナサイマセ♡(10月13日)

由希子にとって二番目に気懸かりな茂隆の就職試験は、面接までいったのに不合格

であった。名古屋でその機会がないのなら、別の土地を考えなければならぬ。厳しい進路選択を迫られることになった。

試験の結果を聞かされた由希子は、茂隆が名古屋を離れてしまうと考えるだけで、もう目に涙があふれてきてしまった。病室にはほかの患者や患者の家族がいたけれど、そんなことはおかまもなく大声を出して泣き出してしまった。

《しーくん、今日はごめんね。泣いちゃって。病院で、しかも周りに人がいるのに泣かれたりしたら困るよ。しーくんが悪い訳じゃあないのにね。本当にごめんね。でもショックだったの。今は落ち着いて、こうして手紙を書いています。

でもね、もし、もしも、しーくんが大分に帰ってしまったら、私たちどうなるか分からないけど、でも私、多分、別れることになるんじゃないかと思う。世の中にしーくん程の人はそうはいないと私は思ってるし、でもそんなしーくんに合うような人はたくさんいるような気がして……。しーくんが他の人を選んだとしても、きっと私は何も言えないと思う。だって私、しーくんにこんなに大切にして貰ってるから。私の性格からして遠距離恋愛なんてとても無理だと思う。今日だって卒業旅行の話、私が入院してるのに、

というよりは「少しでも近くにいてよ〜」という感想です。だけど、しーくんの人生にどうして私がズケズケと入っていくの!!と後から思いました。ごめんなさい。

しーくんはもう私の性格や考え方とか、だいぶ分かっていると思うけど、とにかく自分勝手なの。それに実は超寂しがり屋で甘えん坊で、その他困ったことがとにかくいっぱい。私のほうが勝手に、というか仕方なくここにいるんだけど、毎日会えなくて本当に寂しいの。本当に本当に大好きだから。大分に行っちゃったら、会える回数なんてほとんどないし……だけど、今はこっちに残ってそれからのことを考えないとね。だから頑張ってる。私もしーくんがこっちに残る意味のあるように頑張るからね。オヤスマナサイマセ〜

移植日が決定したのは、十月十五日のことだった。

「ねえねえ、聞いてよ。わたしの移植は、十一月十三日の金曜日、おまけに仏滅の日なんだよ」

看護婦ばかりか、周りの患者にも次々に告げて歩いた。それが、個室に移る時期を早める結果となった。告知しないのが原則の病院だから、あまりおおっぴらにしゃべ

ってもらいたくはないのである。

首筋の手術跡は、痛みはないものの腫瘍しゅりょうとなって残っていた。そのため、十月十九日には放射線を照射することになった。

「ここに放射線をかけたら、髪の毛が抜けちゃうんじゃないのかなあ。どうしよう、ね、どうしようかしら」

そんな不安を看護婦にぶつけたが、翌日には、それも忘れるようなうれいプレゼントがあった。歌手の福山雅治のサインだ。取材を通じて知り合ったテレビ制作会社のディレクターに、もらってきてと頼んでおいたものだ。

七月三十一日には、名古屋で開かれたライブに駆けつけた。熱があったけれど、これを逃のがすといつ聴けるかわからないと思えば、矢もたてもたまらず、前から三列目の席で声援を送ったものだ。福山とは何度も視線が合ったと、由希子は感じていた。

恋人の茂隆は、学校のテストを間近に控えているうえに、二方所目の就職試験にも備えなければならぬ。年が明ければ放射線技師の国家試験もあって、勉強に忙しい。そんな茂隆を手こずらせたのは、十月十八日だった。

《今日も来てくれてありがとうね。テスト近いのに、本当にありがとう。それなのにぐずって、ごめんね。だって、ぐずぐずしたかったの。今日はぐず

の波の上みたい。なあって、いつもだけどね。移植後の私がありますますぐずになるんじゃないかって、心配？ 私もちよつと心配。

「けど、それよりしーくんが私のこと好きじゃなくなつちやったり、他に好きな子ができちやったりするかも……つていう心配のほうが大きい。どうしたらずつと私のこと好きでいてくれるのかな。他に好きな子できたら私はどうしたらいいのかな。ああ、いやだ。考えるのいや。本当にすつごく好きなんだよ。すつごくすつごく好きなんだから!!↑えはつてる。しーくんも私のこと好きつて今は言つてくれてるけど、私はしーくんが私のこと好きつていうのよりもつと好きつて自信ある。ずつと前から。ごめんね。好きつてあまり言わないでつて言う私が、たくさん好きつて言つたりして。このごろ、気弱(?)なのかな。ごめんね。」

「あーあ、ねむたくなつてきちやつた。しーくんのことでも考えながら夢でも見よう! そういえば昨日の夜中、私は布団を抱いてねていたそうだよ。看護婦さんが言つた。ヤバイ。今日はちゃんとしたねぞうでありますように」(10月18日)

手紙では茶めつけなところを見せたが、ものすごいショックを受けたのである。

「もう一カ所、受けるんだから、そう心配しなくていいよ」

「初めの病院が不合格だったとき、由希子が泣き叫ぶのを見て、茂隆はそう言つた。言われてみれば、由希子も少しは安心する。ところがこの日、共通の友人に出す手紙を見せられたとき、これが茂隆の本心だったとしても耐えられないと、取り乱したのだ。」

「二カ所目の病院に落ちてしまったら、もう名古屋で職を見つけるのは難しいかもしれない。そうなれば大分に帰るしかないのだろうか……」

「そう書かれた個所を目にして、由希子はまた泣き出してしまったのである。茂隆が大分に帰つてしまつたら、お互いに好きでいられるかどうか不安になる。きつと、向こうでいい人を見つけるにちがいない、だつて、わたしは病氣なんだから……。」

「ひとしきり泣いたら、すつきりした。次の病院にはなんとしても合格してもらいたい。それには、いつまでもぐずつていてはいけなことに、ようやく気づいたのだ。」

「二十三日には個室に移つた。移植日が少しづつ近づいてくる。これといつて、することのない由希子は、ふと不安に襲われる。」

「骨髄移植がうまくいかなかつたら、どうしよう?」

「移植がうまくいくように、大勢の人たちが協力しているから、頑張ろうね」

看護婦が励ましてくれる。

スプレキユアの使用が始まったのは、十月二十九日だった。スプレキユアは生理に伴う出血を抑えるための薬で、毎日午前八時と午後二時、八時の三回やらなければならない。ところが初日に忘れてしまった。

そこで由希子は、母に小さなノートを買ってきてもらい、薬の使用チェック表をつくった。三十日からは、スプレキユアのほか、目薬や胃薬、それに抗生剤も飲まなければならないからでもあった。

■ 婚約

移植に備えて、個室へ移ったのは十月二十三日だったが、個室での面会者は、患者が独身なら両親に限られる。由希子の場合、妹の久美子も原則として個室には入れない。

由希子には、母の知香子はずっと付き添うことになるが、このころの由希子にとつては、心の支えはなんとといっても土田茂隆であった。母の代わりにできるわけではな

いが、個室に移ってから全く顔を合わせることができないのもつらい。

実際、茂隆が大谷貴子と一緒に見舞いに訪れた三十一日、ひと悶着あったのだ。

「どういったご関係かわかりませんが、個室にはご家族以外、入れない規則になっています」

由希子の個室はナースステーションの斜め前にあるから、二人が入る姿をばっちり見られたらしい。

「無菌化が始まったからですか」

移植経験者の貴子が、看護婦に尋ねた。うなずいた看護婦に、貴子はちよつと怒つたような言い方をした。

「じゃあ、わたしはすぐ帰ります。でもしーくんはこのままいなさいよ」

看護婦は、茂隆にも退室しろと言う。

「だって、家族が一人、個室に入っているのなら、家族の代わりに彼がいてもおかしくないでしょう」

それでも、規則をタテにする看護婦の命令で、茂隆も部屋を出ていかなければならなくなつた。

つまらないなと思っていた由希子の携帯電話が、しばらくして鳴った。貴子だ。

「由希ちゃん、しーくんと婚約しちゃいなさい」
 唐突で意味がよくつかめないが、婚約という言葉には甘美な薫りが漂っている。
 「いま岡崎に電話して、お母さんにも言ったの。さっきの看護婦さん、わたし悔しく
 つてしょうがないのよ。今の由希ちゃんには、誰よりもしーくんが一番頼りになる人
 でしょ。それなら、横にいららうべきじゃないの。家族以外、入っちゃいけない規
 則なら、婚約者になれば堂々と会えるはずでしょ」

なあるほどと、由希子は感心して聞いていた。

いわば、便宜的な「婚約」ではあったが、由希子は無邪気に喜んだ。

《私、しーくんと婚約しました！》というのは、今個室に入っているんだけ
 ど、両親以外は入れないの。でも、しーくんも私も会いたくて、婚約したつ
 てことにすればOKだということで、婚約したということにしている。うち
 の両親なんて、しーくんが来てくれたらやつ当たりの場所ができていいと喜
 んでいる。しーくんは本当によくしてくれて、ご飯を食べた後、スプーンと
 か洗ってくれるし、身のまわりのこと全部してくれるよ。本当に奇特な人だ
 と思うけど、世の中にはたくさんいい人っているよね》（11月3日、大岩久美
 へ）

頭を丸めてしまったのは、十一月二日のことだった。

「どうせ抜けるんだもん、思い切って切っちゃったほうがすっきりするわ」

初夏から伸び始めていた髪の毛は、このころボブくらいにはなっていた。

「ほっておいても抜けるときは抜けるし、そのままでもいいんじゃないの？」

看護婦は止めた。女性にとつて、髪の毛が抜け落ちるといふのは残酷な仕打ちであ
 る。抜けるまでではできるだけそのままにしておきたいと思うものだ。たいていの患者
 はそうするから、看護婦もそのままがいいと言ったのだが、由希子は宣言どおりに、
 丸坊主にしてもらったのである。

こうと思ったら、貫き通してしまうのが由希子の、これまでの生き方だ。それは、
 服薬でも同じである。

「再内服なんて、いやだもんね。絶対に吐かないわよ」

移植に備えた前処置が、十一月六日に始まった。抗ガン剤の服用と、レントゲンの
 全身照射によって、由希子の正常な細胞を含めて、骨髄液を死滅させてしまうのであ
 る。その代わりにドナーの骨髄液を入れることになる。

前処置が始まると、副作用として吐き気に襲われる。吐くものがなくなつて胃液が
 出てくることもしょっちゅうだ。しかし、吐いてしまえば、同じ薬をもう一度飲み直

さなければならぬ。

由希子はそれがいやだった。実際、薬を飲んだ直後に吐き気に襲われたとき、吐瀉としゃ物を口の中に含んで、それを飲み下すことさえしたのである。

前処置の真つ最中、病棟の非常警報が鳴り響いた。火事だろうか？

外敵から身を守ってくれる白血球は、由希子の体内にはほとんど残っていない。避難するため外に出れば、たちまち体は細菌だらけになってしまう……。

「怖いよ、どうしよう。怖いよ、お母さん」

恐怖感に包まれた由希子は、震えながら訴えた。

警報は誤作動であった。医師がやってきて、怯おびえのひどい由希子に、もしものときは自家発電で消火設備も動くからと説明してくれた。それでも、由希子の恐怖感は去らない。

「大丈夫、火事が起きても、お母さんがあんたを毛布でくるんで、おぶって逃げてあげるから安心しなさい」

十二日、無菌室に入った。前日とこの日の午前と午後、全身に放射線を浴びた。三グレイずつ計十二グレイの放射線量は、骨髓移植を受けるためには標準といえるが、

この量は致死量の数倍に達する。

無菌室で由希子に付き添うのは、母の知香子だけになる。父の徳幸ですら、一回の面会は十五分に限られた。本当は茂隆にも横にいてほしいところだが、それは無理と言われた。

■ 骨髓液の初輸入

移植日が十一月十三日と確定してから、多数の関係者が具体的に動き始めた。外国への提供は、民間の九州骨髓バンクからドイツのデュッセルドルフに運んだ例（九二年五月）があるが、外国から受け入れるのは、由希子への骨髓液が日本では最初のケースである。

しかも、骨髓液の移植は、採取から二十四時間以内が望ましいとされている。

由希子のドナーはニューヨークに住んでいたから、最寄りの空港はジョン・F・ケネディ空港になるが、そこから成田までは十八時間もかかる。NMDP（全米骨髓バンク）からは、ユナイテッド航空の八〇一便を利用すると通知してきた。成田着は午

後三時四十分だ。

残る六時間で日本国内の運搬を完了させなければならぬが、できればこれを可能な限り短縮したい。

そこで、関係者は、陸上輸送と航空輸送の双方の可能性を検討することにした。陸上輸送には新幹線も使うのだが、時間がかかる。航空輸送は最も速いが、万が一の「墜落」の可能性もある。

どちらにするか最終結論が出ていないとき、大谷貴子はふと、自衛隊機が使えないものかと考えた。由希子が陸上自衛隊を中心に講演してまわった実績もあったし、自衛隊機なら協力してもらえないのではないかと。貴子は、持ち前の「駄目でもともと」の性格を前面に押し出して、とにかく打診してみた。

反応はよかった。自衛隊は名古屋空港までの運搬を了承したのである。

ところが、運輸省が首を縦に振らなかった。「成田空港に自衛隊機を乗り入れるのは好ましくない」というわけだ。成田開港の経緯を考えれば、難しいのもやむを得ない。

このころから、運搬は「航空輸送」が自然と選ばれていた。もし生着不全せいちゅうぜんなどが起きた場合、輸送時間をけちつたためと言われかねない。それなら最初から、少しでも

速く運べる空輸を選択したほうがいいと、誰もが思っていたのだ。

しかし、自衛隊機が無理と知ってはたと困った貴子は、こんどは厚生省疾病対策課に相談を持ちかけた。疾病対策課は骨髄移植の担当課である。運輸省への問い合わせの結果、こういう回答があった。

「まず、アメリカの専門航空会社に依頼して、チャーター機で名古屋空港まで空輸することが先決。次の策として海上保安庁、消防庁、日本赤十字社、マスコミなどの飛行機を依頼してはどうか。運輸省機もあるが、厚生省から『国策上の見地』としての依頼であれば検討する。それらがことごとく無理なら、自衛隊機の利用も考慮する」

これを基に協議が進められた。アメリカからのチャーター機については、運搬方法はNMDPが決めることなので、日本からとやかく言えない。日本赤十字社機を利用しようといった人は決まりかけたが、日赤機は天候不順だと飛ばないことがわかった。移植当日の天候を予測することは無理だし、もし天候が悪ければ計画しても無駄になってしまう。

最終的には、名古屋に本社のある中日本航空のセスナ機をチャーターすることに決定した。

これでようやく運搬方法は決まったが、ルートや通関手続きをどうするかなど、細

かい打ち合わせがなおもつづく。すべては病院の申し入れから始まるという疾病対策課職員の助言で、第一日赤の病院長が、厚生大臣あてに、関係省庁への配慮を依頼する文書を出した。十一月五日のことだ。

厚生省が、運輸省と法務省に、文書で「便宜供与」を依頼したのは九日である。運輸省には航空管制上の配慮を、法務省には骨髓液を運搬してくるNMDDPのコーディネーターへの入国手続きについての配慮を、それぞれ求めている。

手荷物である骨髓液の入った血液バッグには通関手続きが必要で、これは大蔵省の管轄のだが、大蔵省は文書依頼は不必要と回答してくれた。

また、チャーターのセスナ機にもしものことがあった場合に備えて、成田空港から名古屋まで、三人分のJR切符が、時間をずらせて三種類用意された。こうしてバックアップ態勢も十分に、当日を迎えたのである。

事前の調整がきちんとしていたため、当日は驚くほどスムーズに事がはこんだ。どううまくいったかは、例えば成田での出来事を説明すれば十分だろう。

ユナイテッド航空八〇一便は、予定より二十分遅れて午後四時ちょうどに成田空港に到着した。輸送計画では成田での手続きは十五分と見込まれていた。ところが、チ

ャーターの中日本航空のセスナ機が成田を飛び立ったのは午後四時六分だ。つまり、成田空港での手続きは六分しかかからなかったのである。

ありがたいことに、大蔵省関税局と法務省入国管理局は、担当官をわざわざセスナ機まで出向かせて「機側通関」「機側入国」で処理してくれたのだ。

名古屋空港でもセスナ機は優先着陸することができ、空港から第一日赤までは、救急車の先導にパトロールカーもついた。骨髓液が病院に到着したのは午後六時十一分で、予定より十九分も早かった。

こうして、由希子に生きる希望をもたらした骨髓液は、病院の玄関でNMDDPのコーディネーターであるジャネット・ダイナポリから小寺医師に手渡された。

■世界一の幸せ者

海外からの骨髓液による移植は、日本で初めてとあってマスコミが殺到した。病院の周りをテレビの中継車を取り囲み、無菌室に運ばれる骨髓液を追いかけて、テレビカメラが、骨髓移植センターにまで入り込んだ。

八百ミリリットルの骨髄液は、午後七時五分、由希子の左腕から静かに体内に入っていた。三つの血液バッグに分けられていたが、三つ目が入り終わったのは午後九時十二分のことであった。

「あったかい、本当にあったかいよ」

指の先まで温かくなるのが実感できる。

「わたしって、世界一の幸せもんだね。本当にありがとう」

これで、確実に助かると思った。生着するまで安心はできないが、そうなれば目に見えて回復していくにちがいない。服薬はずっとつづくが、それに耐えていきさえすればいいのだ。

「これでもう、全部わたしのものになったのよねー」

ドナーの骨髄液がすべて体内に入ったのを確認したとき、由希子はこんな叫び声をあげて、成田空港からセスナ機に乗ってきた鈴木律朗ナツキリョウ医師らを苦笑させた。

午後八時から、病院の会議室で記者会見がおこなわれていた。その席で、由希子のメッセージを、大谷貴子が読み上げた。

《骨髄移植日は、二回目の誕生日といいますが、わたしは本当に今日が二十歳最後の日。明日からはこの素晴らしい命の贈り物で二十一歳になります。

今まで生きてきた中でいちばん素晴らしい誕生日プレゼントでした。

ドナーの方が見つかるまで、一時は不安でいっぱいになり、くじけそうにもなりましたが、今はもう大丈夫です。今なお、この素晴らしいチャンスを待っているたくさんの方々のためにも、また、日本の骨髄バンクを盛り上げていくためにも、歯をくいしばって頑張りたいと思います。ドナーの方も、わたしのために頑張ってくださいなんですから……。この大きな生きるチャンスを得たことは、もう言葉にあらわせないくらいの感動でいっぱいです。

ドナーの方、Thank you very much. 皆さん、本当にありがとうございました。由希子は頑張ります

ダイナポリは緑色のハート型ペンダントも携えていた。ドナーからのプレゼントだという。ドナーは、国籍はアメリカながら両親が中国人で、二十代の女性であった。

報道陣に混じって、由希子の高校時代の仲良しグループも、病院に駆けつけた。色紙に寄せ書きをして、廊下に出てきた父の徳幸に託して帰っていったが、どさくさまぎれて移植センターの中に入り込み、ナースステーションから由希子に電話をかけ

てきたのは、久保由紀子だった。

高校時代の仲良しグループはこれ以後、病院を訪れることはない。風邪をひきやすい季節とあつて、雑菌を持ち込むことが回復に最もいけないと聞かされたからだ。それに何より、仲良しグループの全員が「移植さえ受ければ、中堀は確実によくなる」と信じ切っていた。

だから、春には九州旅行を楽しむ予定を話し合つて、由希子にも伝えてきた。仲良くなつた者同士で、修学旅行と同じルートをたどろうと、春までに旅費をためておくことに決めたのである。

由希子は、生命をプレゼントしてくれた見知らぬドナーに感謝の思いをこめて手紙を書いた。

■ 婚約者への葉書

移植当日は、さすがに疲れた。翌十四日は二十一歳の誕生日である。無菌室へ、由希子は葉書をどつさり持ち込んでいた。携帯電話もあるのだが、経験上、茂隆には文字に書いたほうが素直になれる気がしていたからである。

《移植、無事に終わったよ。これで少しは安心です。今日も相変わらず調子はいいかな。もう少ししたらまた放射線の影響とか出て、ぐったりするんだろうけど。ごはんがマズイ。リクエストしたものは出てこないし、早くここから出て、おいしいものが食べたいわ。そうそう、新聞とか大きく載つてみたいだね。見た？ お母さんは朝から新聞買いに出かけたよ。ニュースでもたくさんやってみたい。スゴイね。ドナーの人はどうやら女の人みたいですよ。Birthdayプレゼントまで貰つたんだよ。結構若い人みたいだよ。NM DPの人が彼女の両親に会つたつて言つてもん》(11月14日)

《今日で移植して12日目です。手足にGVHDが出て、お腹の方にも来ているので、下痢がひどかったみたい。今は治療がよく効いていて、だいぶ楽になりました。熱も下がつたし。今、いちばんの望みは味が分かるようになりたいこと。全然分かんないんだよ。ウーロン茶しか飲んでないけどさ、ウーロン茶がにがいてことだけはわかるの。おいしいものが食べたいというよりは飲みたい！ ノートにいっぱい飲みたいもの書き連ねてはじーっと見てあの時、もつといっぱい飲んでおけば……とか思つたり。退院したらすぐおいしいジュースをおかわりしていっぱい飲んでやるー。それにしても移植

って大変だつ。早く人間らしいまともな生活を送りたいわ。早くクリンから出たいけど、ちよつと怖い気もする。足とかおぼつかないし、まだ字が汚いけど許してね》(11月25日)

茂隆が二カ所目の病院の試験を受けたのは、十一月三十日である。これを逃すと、名古屋の病院での就職はあきらめなくてはいけない。

《今日もいちだんとドラえもんハンドが痛い。1本のほうはだいたい調子よくなって来ているみたいだけど、精神的におかしくなりそうです。やっぱり、人と接しないのって、人間にとっては致命的だよ。特に寂しがり屋さんの私には、1カ月が限界だわ。早くおいしいものがいっぱい食べたい。考えるのがキリキリするけど、やっぱり食べられないのってとっても辛いよ。あとどれ程したらまともな人間らしい生活ができるのかな。それにしても戦争中の人は食べるものがなかったんですよ。信じられないよね。今は平和な時代だよ。これから先、これ以上苦労することってあるのかなあ。病気になるってからあまり苦労しなくて来て、移植はとも苦しかったけど、もうこれ以上辛い思いするのイヤだわ。慢性GVHDとか出たら、もうどうし

よう。考えるともた胃がキリキリする。本当に早く良くならないかな。今週中にはきつと個室に移れるくらいにはなると思うけど、白血球がなかなか上がってこないのよね。でも私にはどうしようもないんだよ。ただじつと耐えるのみ。これが辛いんだ。あ、でも頑張るしかないもんね。早くしくんに会えるように頑張るから待ってね》(12月2日)

十二月四日、ようやく由希子は無菌室から個室に移ることができた。茂隆は就職試験に合格した。二重の喜びがづいたことになる。

由希子は、退院後の生活について、母と相談しあっていた。

「退院できても、通院がしばらくつづくとと思うの。それなら、神宮前あたりに住めれば便利なのよね」

茂隆の勤務先と由希子の自宅、それに病院を結びつけると、名鉄の神宮前駅が最良の位置になる。駅名の元となっている神宮とは、熱田神宮のことである。JRや市営地下鉄の駅も近く、交通便利な場所であった。

由希子は、そこで茂隆と住めばいいと夢見ていた。

「しーくんは病院に行くでしょ。わたしは、骨髄バンク運動をやっていくの」

「いいよ。そのくらい、なんとかしてあげるよ。車も安いものになるだろうけど、必要なら買ってやってもいい。わたしたち親には、そのくらいしかできないもの」

母も積極的に賛成してくれた。けっこう口喧嘩もしたし、口癖のように由希子のことを「わがままな子」といつていた母とのあいだが、このところ非常にうまくいつている。

「でも、しーくん、一緒に住んでくれるかなあ。わたし、子ども産めそうにないもの」

その点は、母も心配らしかった。

「今の時代、結婚だけが人生じゃないんだから、好きだっていう気持ちがかよいあう年数だけでも、一緒に住むことにしたら？ あんたがボランティアに熱中して食べていくのに困るようになったら、お母さんたちが援助してあげるよ」

移植を終えて、病気のつらさはあるけれど、こういう形で母とじっくり語れることは、大きな収穫の一つであった。

「わたし、お母さんたちとずっとは離れていられないから、神宮前に住んでも毎日、ご飯を食べに行くからね」

母が、うれしそうにうなずいてくれた。

■GVHDとの闘い

話はさかのぼるが、移植四日目の十一月十七日に熱が出始めた。朝方三九度上がった熱が、夜には四一度を超したのだ。薬を飲んでなんとか三九度台まで下がったものの、翌日にはまた四〇度を超えた。

由希子は熱には割合強いのだが、四〇度を超すとさすがにつらい。悪寒おかんも加わってきた。

なかなか下がらない熱に、ドナーの骨髄液が生着しないのではないかと、不安に襲われる。そんなとき、母と看護婦が猛烈な口論をした。

「どうして解熱剤を出してくれないんですか。由希子がこんなに苦しんでいるのを、看護婦さんはほっとくんですか。由希子は実験台じゃないんですから」

「そうじゃありません。熱の原因を突き止めないと、安易に解熱剤は出せませんよ。いま、一生懸命に原因を探っているところですから、もう少し待ってください」

発熱の原因としては、感染症が考えられるのだが、小寺医師は「その可能性は絶対はない」と断言した。

「嘔吐感に耐えて完璧に服薬していたし、腸内の雑菌は完全に陰性だった。彼女に限

って感染症があるはずがない」

最終的な原因は、いくつかの可能性が示されたものの、確定はできなかった。だが、小寺医師の言葉は、由希子が驚くような態度で、薬をきっちり飲んでいたことを証明する。最初の入院から由希子を見ている小寺医師は、この入院での由希子の頑張りには、目を見張る思いであつたらしい。

生着が確認されたのは、移植十四日後の十一月二十七日のことである。生着というのは、ドナーの骨髓液から新たな血液が造り出されることだ。そうなると、由希子の血液型が、それまでのA B型からドナーのO型に徐々に変化していく。生着してしばらくは、A B型とO型が「混在」するというややこしい状態がつづく。

血小板輸血は、移植後にも必要になる。由希子は、妙な因縁だと思った。茂隆がO型なのだ。

A B型のころは、なおくんに輸血をお願いして、今度はしーくに頼むことになりそうだなあ……。

だが、生着は移植の成功を占う一里塚に過ぎない。GVHD（移植片対宿主病）との闘いが待ちうけているのである。

GVHDとは骨髓移植特有の症状だ。肝臓や腎臓などの移植の場合には、拒絶反応が起きるが、これはドナーの臓器を受け入れた患者が拒否するものである。GVHDはその逆の現象をひき起こす。移植されるものが骨髓液であるため、その中に含まれるリンパ球が、患者のほうを「異物」と判定して、攻撃を始めるのだ。障害は、皮膚や肝臓に顕著にあらわれる。

由希子のノートに「体調good」と記入されたのは、実は無菌室に入った十二日から、二十一歳の誕生日となった十四日まで、わずか三日間しかない。

二十三日には「味がわからない。下痢ひどい、GVHD手足、口」、二十四日は「黄だん。GVHD手足、口」、二十七日「手、とても痛い。くちびるから血。顔がむくんでいる。黄だん」、二十八日「手、とてもイタイ。黄だん。胃痛」などの文字がつづくのである。

十一月二十九日、無菌室に電話が入った。福島市と会津若松市で開かれた骨髓バンクレディスシンポジウムを終えて、帰宅途中の大谷貴子や刀根麻理子、それに東海骨髓バンクでドナーとなった池田あゆみからだつた。

「頑張つてよ。由希ちゃんのために、三人はきょうからアルコール断ちするって決めたよ。わたしはプラスして、大好きなチョコレートをやめるわ」

最初に話しかけてきたあゆみが、そう言って励ましてくれた。すぐ、貴子に替わる。「たこ焼きが食べたいよー」

甘えた。しかし、最後の麻理子には弱音をはいてしまった。

「すごくしんどいの。こんなにつらい思いをしてまで、生きていなきゃいけないのかしら……」

麻理子の声音が急に変わった。

「何言ってるのよ。アメリカから空輸された初めての骨髓液じゃないの。第一号としての生き証人になって、これから同じ病気の患者さんを助けるのは、由希ちゃんの仕事じゃないの」

由希子にもそのくらいのこととはわかっているのだが、力なく「そうね」と答えるのが精いっぱいであった。

膀胱炎の疑いが出てきたのは十二月に入ってからだ。

さらに、厳しい状況となったのは、両足と両手にGVHDが顕著にあらわれてきたことだった。

このGVHDはやがて、肝臓の機能をはつきりと阻害していく。黄疸状態は顔だけではなく、白目の部分まで黄色くさせ、苦しさを流す涙までが黄色かった。

牧野亜紀子から電話がかかってきたのは、そんなときだった。

「本当に中堀？ 看護婦さんが出てきたのかと思っちゃ」

亜紀子は、由希子の声が全然違うという。「味がわからないのよ、水ってどんな味してたかも思い出せない。顔がパンパンだから来なくていいよ。来ても会わないからね。それより、わたし死んじゃうかもしれない。しんどくて……」

いつもの由希子なら、電話はもつと長くなるのだが、さすがに受話器を持つのがつらい。数分で切ってしまった。

十二月十八日、大谷貴子と刀根麻理子がやってきた。

「夜はね、東海骨髓バンクの忘年会なのよ。正確には『ドナーに感謝するつどい』っていうんだけど、まあ忘年会でいいでしょ。わたしのピアノ演奏で、刀根さんがクリスマスソングを歌うことになってるのよ」

一週間後のクリスマスMASを、とうとう病院で迎えなければならぬ。これまでは、無理を言っても外泊してクリスマスMASを楽しんだのに、来年はどうなるかしら……。

「はい、プレゼントよ」

麻理子が、歌手の福山雅治のテープを差し出した。福山が激励のメッセージを吹き込んでくれたのだ。

《ツアーのリハーサルを終えて一段落しているところなんですけど、由希子さんは、このあいだばかり送ったテープとかは聴いてくれたでしょうか。フアンの一りでいてくれているみたいで、今は苦しい状態なのかもしれないですけど、そういう毎日の中で、ぼくの存在があるっていうのは、うれしくもあるし、意外なことであつたりもするんです。だから、頑張んなきゃいけないと思うんですよ。由希子さんだけじゃなくて、ほかのぼくの知らない人は仕事とか悩んでいる中でも、ぼくの歌を聴いてくれている中で、励まされているという手紙を時々もらつたりするんだけど、そういう負けれないなという気持ちは自分にもあつて、お互い頑張つたうえでまた会えるといいと思っています。そんな気持ちの歌が今回のアルバムのなかに入っているんですけど、頑張れたらいいなと思います。できれば元気な姿でコンサートで会えるといいと思います。それじゃ頑張ってください》

元気なら、跳び上がって喜んだらう。何度も再生して聴いたにちがいない。しかし、身体のほうが言うことをきかなかつた。

それでも、由希子は、持って生まれた明るさを失いたくなかつた。翌春に挙式する看護婦には、新婚旅行先にニュージラード行きを熱心に勧め、自宅にあつたガイドブックを持ってきてもらつて貸した。

クリスマス前には、ヒイラギに代えてスーパールの広告を丁寧に折って、クリスマスリースをつくつた。

年末、三人の患者が相次いで亡くなつた。

急性GVHDは、発症の程度によつて0からIVまで五段階に区分されている。Ⅲ度以上は生命にかかわるが、由希子の場合是最重症のⅣ度であつた。主治医の小寺医師自身が、長い移植経験の中でも数例しか経験していない。

発赤を起こした皮膚が、ボロボロとはがれていく。ガムテープに張り付けて掃除をしても、床ははがれた皮膚ですぐいっぱいになつてしまう。

「みんな、こんなになつていゝらうね」

母は、ほかの患者もこうした経験をたどるものだと、思い込んでいた。尿の回数も頻繁だつた。一日に数十回はざらで、便を含めて、時間と量を記録するのは、母の役割だ。すぐにメモをしておかないと、すぐ次がやつてくる。

大晦日のNHK紅白歌合戦をテレビで見ているうちに、由希子はうつらうつらしながら眠りに入った。

年明けの九三年元日、由希子はかろうじて二通の手紙を書いた。

一通は、病院の検査部職員の近藤恵美子^{こんどう えみこ}あてのものである。恵美子は、骨髄バンク運動にも携わっていたので、通院中に仲良くなった。

《先日はとても素敵な絵と、Xmas cardをふうもありがとうございました。早くお礼を言わなくてはと思います。体のほうがえらくて遅れてしまって、申し訳ありません。今はまだ絶食状態で、お正月らしくないお正月を迎えています。早くおいしいものがたくさん食べたい！ 大谷さんに負けないくらいくいしん坊の私です。

明日で移植して50日目になります。GVHDがともひどく出て、とても大変だけど、せつかく頂いた大切な命だから、ゆつくり気長に治していこうと思っています。きつと1993年のXmasやBirthdayは楽しいものとなることを信じて……。

春には、本当に花見ができるといいな。みたらしだんごなんて、考えただ

けでよだれが……。食べ物の話ばかりでごめんなさい。それから、字が汚くごめんなさい。菓のせい、手が震えるんです》

もう一通は、闘病仲間で中学生の高品亮介にあてて書いた。

《あけましておめでとう!! といっても私は個室で、しかも絶食という悲しいお正月です。あーお腹がすいた。亮ちゃんはとても順調のようで何よりです。東海骨髄バンクの人たちがとても喜んでいました。もちろんドナーの人もきつと大喜びでしょう。

Xmasには素敵な本をどうもありがとうございます。何だかちよっぴり不思議な内容の本だったけど、亮ちゃんは読んだのかな。Xmas cardもとてもかわいくて、気に入って飾っていました。来年……あ、もう今年のXmasは何でも食べられて、髪も生えそろって、友達や家族と楽しく過ごしたいね。きつと、亮ちゃんは春までには退院できるんじゃないかなあ。

私も、とっても大変だけど、せつかく頂いた命を無駄にしないように頑張ろうと思っています。それでは、暇だったら返事ちょうだいね》
この二通が、由希子が自分自身で書いた最後の手紙になる。

一月二日から、別の新しい薬の使用が開始となった。治療薬である。

「先生、その薬は何人に使って、何人に効果が出たんですか」

由希子は、自分の治療に使われる薬については、しつこいくらいに薬品名や効果などを尋ねた。このときも例外ではなかったので、この時点ではまだ頭はしっかりしていた。

ところが、四日になると目がひきつき、折れるくらいの力をこめて歯を食いしばった。骨髄移植センター全体に轟き渡るような声をあげた。結局この薬の使用は中止となった。

「おかあさん、暗いわ。明かりをつけてよ」

そんなことを言い出して、知香子をびつくりさせた。蛍光灯はこうこうとついでいるのに、由希子の視力がなくなっていたのだ。ずっと見えないわけではない。たまに視力を失うようになっていた。

夜になると、幻覚にとらわれるようになった。それでいて、昼間の調子のいいときには、知香子を気遣う言葉が出てくる。

「わたしって、幸せ者よねえ。いろんな人とも知り合えたし」

「あなたは、どう思っているか知らないけど、わたしたちも一生懸命に育ててきたつ

もりでいるよ」

「わかってるわよ。のびのびと、やりたいようにやらせてくれたものね」

一年前なら、こうはいかなかっただろう。恋人を得て、骨髄バンク運動を通じていろんなことを知るにつけ、親のありがたさがずいぶんわかってきていたのである。

茂隆が、新年になって初めて見舞いに訪れたのは、六日のことだった。四日まで帰省していたのだ。

「手を握ってちょうだい」

茂隆に甘えた由希子だったが、由希子自身の手に力がなかった。

血小板輸血が必要だということで、茂隆は八日に由希子に血小板を提供した。

「しーくんの誕生日までには、退院してるよね。去年はパジャマをつくってあげたけど、今年は何にしようか」

茂隆の誕生日は五月七日だが、パラパラ広げる手帳の、四月十二日のところに「百五十日目」の文字が見える。そのころには、とっくに退院しているものと考えていた。茂隆はこの日から毎日、病院を訪れることになる。

だが、由希子は、うつらうつらする時間が長くなっていった。傾眠という現象である。

「もう、だめかもしれない」

母の知香子が、帰ろうとする茂隆をエレベーターまで追って、そう耳打ちした。年末には褐色だった尿の色が、この時期には黒く変色していたのだ。看護婦にはひとことも漏らさなかった弱音を、由希子が口にするようになっていた。

「移植をすれば治ると言われたからやったのに、こんなにひどいんじゃない……」
十日には、保育園時代から仲良しの玉谷香里が見舞いにやって来た。個室に入つてすぐ、香里がたじろいだように、由希子には思えた。無理もない。香里には、目の前の由希子が弱々しく、表情をつくるのもつらそうに見えたのである。

■臨終、別離

一月十一日午前四時に目覚めた由希子は、大きな声を出して知香子を驚かせた。

「徳川家康が攻めてくる！」

夢の中に、家康が出てきた。生まれ故郷が生んだ英雄が、なぜ攻めてくるのか、このころの由希子には、それを判断する力がなかった。母も、どうしてなのか、わからない。

左右の感覚がわからなくなつてもいた。眠れないまま六時になつて、検温に訪れた看護婦に年齢を聞かれた。それには正確に答えられたのだが、きょうが何月何日なのかを問われて、由希子は答えることができなかった。

午前十時の検温では、ずっと世話になつてきた看護婦の名前を思い出せなかった。午後になつて盛んに涙を流したが、真つ黄色であった。

うつらうつらがつづいていた由希子が、眠りに入つたのは午後三時である。軽いイビキをかいていた。それ以後、ついに目覚めることはなかった。

午後九時前に、父の徳幸、妹の久美子、そして大谷貴子が個室にやってきた。由希子は血漿交換を受けている最中だった。

「由希ちゃん、わたしよ。貴子よ。わたしは、きょうでやっと移植から丸五年たったの。由希ちゃんも頑張つてね。早くよくなつて、一緒にバンク運動をやりようよ」

患者の知覚の中で、聴覚だけは最後まで機能を果たしていると聞かされている貴子は、由希子の耳元で盛んに励ました。だが、由希子は相変わらずイビキをかいている。消灯時間となる九時過ぎ、帰宅する貴子は、廊下でフツとつぶやいた。

「わたしの五年目を、祝ってくれたみたい頑張つたのね」

なんとか峠を越えられそうだというので、つづいて久美子も帰宅していった。

日付は十二日に替わった。

午前一時過ぎ、呼吸が不規則になり、ときどき止まった。三時三十五分、溜め息をついてから、自発呼吸ができなくなった。

延命措置を施すかどうか尋ねられた両親は、口をそろえて答えた。

「本人も、早く楽にしてほしいと言っていましたから、ここまでやっていただいで、わたしたちにも悔いはありません。苦痛のないようにしてやってください」

こうなる以前から、両親は覚悟を決めていた。どうしても助からない状態になつてから、人工呼吸をしても無駄な措置である。由希子自身、人工呼吸は望んでいなかった。

一九九三年一月十二日午前三時四十二分が、由希子の臨終だった。骨髄移植からちょうど六十日後のことであった。

エピローグ

恋人の土田茂隆は、就職先は決まったものの三月に受ける放射線技師の国家試験に備えて、新年にもかかわらず受験勉強をつづけていた。由希子が息をひきとった夜、一段落して眠りについたのは午前三時ごろだった。布団に入ってすぐ、ふっと目覚めた。

「しーくん、苦しいの。早く血小板ドナーを連れてきてよ」

由希子がそう言うて電話をよこしたのだ。声だけの由希子だった。目覚めてみて夢だと悟った。なんだ、夢だったかと再び寝入る際に時計を見たら、針は三時四十分ごろをさしていた。

高校時代の仲良しグループは、いきなり由希子の死去を知らされてパニック状態に陥った。

しかし、亡くなった事実は曲げようもない。夕方、名鉄の東岡崎駅に集合した。

「中堀は、『もし亡くなったらひつぎをバラの花で埋めて』って言ってたでしょ」

駅構内にある生花店で買い求めたら、十数本しかなかった。それだけでは、あまり

にも寂しい。駅を出て生花店を探し歩き、ようやく五十本買ってきた。もっと欲しかったが、それしかないのだ。

バラを携えた一行は、通夜がおこなわれる葬祭センターに向かった。葬祭センターは、由希子が高校時代まで過ごした家から、歩いて五分もかからないところにある。

祭壇中央に置かれた由希子の写真は、成人式前に市内の写真館で撮影し、写真館がPR用に大きく伸ばして店頭飾っていたものである。

告別式は同じ葬祭センターで、十四日午後一時から執りおこなわれた。岡崎地方はいにくの天候で、小雨がふりつづいていた。

友人たちは、告別式の朝早く集まって、バラのトゲを取り去る作業をつづけた。

「トゲが付いたままだと痛いから、そのときは取ってよね」

由希子がそう言っていたのだ。

弔辞を述べたのは、高校時代の友人の久保由紀子である。由紀子は亡くなった日に、由希子の母から依頼されてびっくりした。仲良しグループの一員として、卒業後も親しく付き合っていたが、弔辞にはもっとふさわしい人がいるかもしれない。

しかし、告別式まで時間がない。ここでことわってしまえば、また誰かを探さなければならず、それではかえって両親に迷惑をかけてしまうだろう。そう考えた由紀子

は了承したのだった。

語るべき内容を考えるには、一晚という限られた時間しかなかったが、由紀子なりに感じたことを素直に表現することにした。

《由希子さん——そう呼びかければ、明るく笑って応えてくれるような気がしてならないのです。目を輝かせながら話を聞かせてくれたあなたの姿が、もう見られなくなるなんて、どうしても信じられないのです。

卒業後に発病した白血病の治療に対し、あなたは決して弱音をはかずに頑張っていましたね。私たちが気をつかわないようにと、絶えず私たちを気づかい、楽しい話をたくさん聞かせてくれましたね。そんなあなたの姿に、私はいつも励まされていました。

テレビなどを通じて自分の病気を公表するには、たいへんな勇氣を必要としたことでしょう。けれど、あなたは、白血病を自分ひとりの病氣としてではなく、他の患者さんすべての病氣としてとらえ、あなたひとりが生き続けるためにではなく、そのすべての方たちに生き続ける希望と機会を与えるために、マスメディアを通じて全国の人たちに骨髄バンクの登録を呼びかけました。あなたの言葉に心を動かされ、ドナーとしてバンク登録した人が、私

の周りにもいました。そして、あなたのその姿をみて、あなたと同じ病にかかり、骨髄移植を待ち続ける全国の多くの患者さんが、勇気づけられたはず
です。

由希子さん。あなたが去年プレゼントしてくれた鉢植えの木は今、大きな葉をつけ、確実に生長しています。木々が深い根を張り、幹を太くし、青々とした葉を生い茂らせながら生長していくように、あなたが生前望んでいた国内の骨髄バンクの充実が、さらなるドナー登録の基盤の上に図られ、ひとりでも多くの患者さんが生きるチャンスを得ることができるよう願っています。

そして、私自身も、骨髄バンクの存在をより多くの方たちに知ってもらい、ドナーとして登録してもらえよう、働きかけていきたいと思えます。それが、あなたが示してくれた優しさに報いる道であると思います。《

参列していた骨髄バンク運動関係者も、この弔辞には深く感動した。
最後の別れがやって来た。ひつぎをのぞき込んだ両親はホッとした。息を引き取った直後の由希子は、さすがに無念の表情を残していた。それが通夜ではやわらぎ、今は微笑すら浮かべているように見えたのだ。

普通の葬儀では、故人との対面は親族だけか、せいぜい親しい知人に限られる。それが、由希子との最後の対面は、参列した約四百人のほとんどが列をつくった。葬祭センターの職員が、時間が迫っているからと何度も促したものの、予定時間を三十分以上は超えた。

長い列がほぼ途切れるころ、父の徳幸が茂隆に声をかけた。

「しーくん、よかったら由希子の写真を持ってやってくれないかな」

茂隆には、全く予想もしていなかった言葉だ。徳幸の隣で、知香子もうなずいている。一瞬のうちに、由希子との楽しかった日々がよみがえった。

茂隆の肩が激しく震えた。両目から涙がどつとあふれた。我慢しきれず、茂隆は嗚咽した。

両手に由希子の写真の入った額を抱えた茂隆が、葬祭センターの玄関に出てきたとき、参列者の誰もが、その姿をごく自然に受け入れていた。

浄蓮院釋尼清由

これが、由希子の戒名である。

妹の久美子は、医療事務を学ぶため名古屋駅近くの専門学校に進んだ。由希子の闘病生活を見ていて、少しでも医療の現場に身を置きたいと考えたからだ。

土田茂隆は、予定どおり名古屋市内の病院で、放射線技師として働き始めた。由希子が亡くなったあと、食欲不振に陥ってかなりやせてしまったが、三月の国家試験に合格してから、ようやく立ち直ってきた。

中堀由希子が亡くなったあと、名古屋第一赤十字病院では、全米骨髓バンク（NMDP）から提供を受けた骨髓液によって、九三年中に二例の骨髓移植が実施された。

二例とも経過は順調に推移している。注目すべき事実は、いずれもドナーが白人であることだ。由希子のドナーは、国籍こそアメリカ合衆国であるものの、血液学的には日本人と共通点の多い中国人であった。由希子につづく二例によって、全くの異人種間同士の移植でも、骨髓液が生着することが証明されたのである。

これは、今後の骨髓移植を考えうるうえで、実は大変なニュースとなる。

その成果が実現できたのは、由希子の移植に当たって、NMDPにドナーを探してもらうだけにとどまることなく、骨髓液の提供によって、それを活用した移植が日本で実施できるよう、名古屋第一日赤がNMDPの認定病院になったからにはかならない。

この事業は、今のところ名古屋第一赤十字病院だけのものだが、日本骨髓バンクの中にも、「国際問題小委員会」がつくられている。近い将来、より規模の大きな骨髓バンクの国際交流が始まろうとしているのである。由希子の移植実績がなければ、これほど早くは実現しなかったにちがいない。



一九九四年一月十二日――。

本書の主人公、中堀由希子さんの一周忌の法要が自宅で執りおこなわれた。テレビ局が一社、取材に訪れたが、由希子さんの両親は、こもごもこう語った。

「由希子は亡くなってしまいましたけど、ずっと骨髓バンクのお役に立っているのを知って、素晴らしい子どもを育てたんじゃないかと、お互い言い聞かせているんです」

恋人だった土田茂隆さん、大谷貴子さん、高校時代の友人たちに混じって、末席に座った私は、手を合わせながら由希子さんに詫げるしかなかった。

「間に合わなくて、ごめんね」

一周忌までに刊行するのが、取材を始めたころの目標だったからである。

由希子さんに初めて会ったのは、東京のシンポジウムのことだった。九二年二月二十三日である。

多くの人たちが受けた第一印象と同じように、私も「すごい美人だな」と思った。慢性骨髄性白血病の患者だと大谷さんに耳打ちされ、レセプションが始まる直前に取材させてもらった。そのころ、拙著『生命をください！ルポ骨髓移植』（講談社刊）の取材を始めたばかりだったから、患者の一人として登場願えることになったのである。

淡々と語る由希子さんに悲壮感はなかった。恋人の存在に触れたとき、むしろ天性の明るさがそのまま出ていたように思う。ちよっぴり、はじらいすら見せた。

その折に、彼女はきっぱりと言い切ったものだ。

「移植が受けられて、元気になったら、わたしの経験を書いて賞をとりたいんです」

いきなり「亡くなった」と聞かされたのは、当日の昼少し前のことであった。その日は終日、仕事が手につかなかったのを覚えている。告別式では、ひつぎの中に『ルポ骨髓移植』を納めさせていただいた。

全米骨髓バンクとのコンタクトを含め、最後の入院での由希子さんの状況を改めて取材するうちに、「書くことができなくなった本人に代われないものか」と考えた私は、由希子さんの生涯を単行本に描くための了解を、三月に入って両親から得た。

ところが、いくつかの出版社に打診したものの、色よい返事が返ってこない。取材だけは重ねていたが、とうとう初秋になってしまった。最後の手段として、由希子さんが応募しようと考えていた、ノンフィクション賞に出すしかないところまで、実は追い詰められていたのである。

その間に、十五秒のスポットCMが流れ、新聞や週刊誌に紹介された。そんな折、学習研究社からの出版化がようやく決まったのである。そうなると思議なもので、テレビドラマ化の話すらたちまち具体化していった。

もし、秋が深まっても出版化の打診がなかったら……。それを考えると、今でも冷や汗の流れる思いがする。

さて、執筆に当たって、由希子さんの生涯をルポルタージュの手法で描くなら、そう難しさはない。ところが、「由希子さんの視点で」という注文があった。これが、意外と容易ではない。なにしろ主人公は二十一歳の乙女であり、書き手である私はオジサンなのだ。さて、どうしたものか……。

そこで、はたと気がついた。由希子さんの父・徳幸さんと私は同じ一九四六年生まれなのである。つまり、由希子さんは「娘」といってもさしかえない人なのだ。そう考えるようになってから、ずいぶん気が楽になった。

執筆するうえで心がけていたことといえば、「等身大の由希子さんを描こう」という一点に尽きる。必要以上に美化することは、かえってよくないと考えたからである。ありのままを描くだけで、彼女が考えていたこと、やろうとしていたことは、そっくり伝わってくる。そのままをたどることが大事だろうと、私は考えた。

そうしてみると、由希子さんが白血病と告知されてから亡くなるまでの、二年あまりのうちに、彼女が急速に変化していったことに気づかされる。

ニュージールランドで発病してから、帰国後の入院を経ての一年、彼女の周りには同年齢の友達ばかりであった。それが、二回目の入院の後期、つまり九一年秋に磯和夫さん、大谷貴子さん、神山賢一さんと出会い、さらに恋人となる土田茂隆さんを知ることによって、がらりと変身していく。

とくに、九二年一月の成人式を終え、骨髄バンク運動にかかわるようになってから、いわゆる「大人との付き合い」が深まるにつれて、由希子さん自身が急成長を遂げていくのである。

大人の中でも、骨髄バンク運動を進める人々は、ひと味ちがっていると、私は以前の取材を通じて実感している。個人としてではなく、ボランティアグループとし

てとらえたとき、実に多様な人々によって構成されているからだろう。我が子を亡くした親もいれば、患者自身もいる。くよくよ考えているより、骨髄バンクのよりよい運営と発展を願い、それをすぐ行動に移す人たちばかりなのだ。

主治医であった小寺良尚第四内科部長（骨髄移植推進財団中央調整委員長）は、由希子さんについてこう語る。

「結果的には、二年少しの余命しかありませんでしたが、告知された者の強さというものを非常に感じました。現実を直視しながら、頑張りを見せましたね。告知されたのに加えて、骨髄バンク運動に携わったからでしょう。だから移植を受けるときの闘病態度にはすごいものがありました。若い世代に対する期待感や信頼感が高まったのです」

告知の問題は、いちがいに結論づけられるものではないが、由希子さんのあり方は、ひとつの参考にはなるだろう。それにしても……と、感じられないのは、「死」に対する限りない恐怖感が、日本人のあいだには強すぎるのではないか、ということである。

しばしば言われるように、人間は生まれた瞬間から、死に向かって生きつづける宿命を負わされている。一人の例外もなく、やがて確実に迎えるのが死なのである。とすれば、死というものを、もう少し前向きに考えられないものだろうか。それを深めることができれば、告知問題はかなり解決に近づくとと思うのである。

そう考える人が増えてきたのか、このところマスコミに登場する患者や元患者、患者家族が増加してきた。実際に移植を受けたか、ドナーを心待ちするかの当人が肉声で語るのだから、インパクトは強い。日本骨髄バンクへのドナー登録者が、九三年の年末までに三万六千人を超えたのは、そうした人々の存在もあってからであろう。

日本骨髄バンクは、九三年一月に第一号の移植を実施した。現在の移植方法を大幅に変えるような、新たな医療技術・薬品が開発されない限り、ドナーの必要性は今後も全く変わらない。目標とする十万人を達成しても、ドナーリクルートはなおつづけなければならぬのである。

由希子さんの移植によって、全米骨髄バンクとのルートが確立されたので、このルートによる移植は今後もつづくはずだ。したがって、名古屋第一赤十字病院だけではなく、できるなら日本骨髄バンク認定の移植病院が、そのまま全米骨髄バンクの認定病院になることが望ましい。その前段階として、今すぐにも認定されるとおもわれる病院が、全国に数カ所存在している。これらの病院が認定されれば、ドナーが見つかる

りにくい患者には、大きな朗報になるはずだ。

ともあれ数多くの人々の協力を得て、ようやく本書は出来上がった。中堀さん宅に何度もお邪魔したし、小寺良尚部長ほか名古屋第一赤十字病院の関係者にも、絶大なご協力をいただいた。また、学習研究社には出版の機会を与えられ、安西剛氏には、刊行までに適切な指示をちょうだいした。名前をあげない人々を含め、それぞれに感謝申し上げます。

最後に、中堀由希子さんをはじめ、志半ばで天国に旅立たなければならなかった患者さんの冥福を祈るとともに、その方々が切望していた日本骨髄バンクの拡充と発展を切に願いたい。

文庫版あとがき

本書が原作となったテレビドラマ（タイトルは同名）が一九九四年十月四日、TBS系列局で全国放映された。君塚良一氏の脚本で、由希子さんに和久井映見さん、恋人に筒井道隆さん、大谷貴子さんに東ちづるさんが扮した二時間ドラマである。

折から発生した北海道東方沖地震（マグニチュード七・九）のあおりで、関東以北では最終のクライマックスにさしかかる午後十時三十八分に中断するハプニングに見舞われた。その週の土曜（八日）午後完全に完全放映されたが、製作した毎日放送（MBS）は、このドラマを骨髄移植啓発キャンペーン『10万人目の奇跡』の総仕上げとして位置づける力を入れようだった。

キャンペーンの意味についてはプロログで紹介したとおりだが、由希子さんが登場したCMなどによって骨髄バンクへの関心は高まりを見せ、ドナー登録者は日本骨髄バンクが発足した当初の目標であった「十万人」が一九九八年八月に達成された。しかし、現在は「三十万人」が新たな登録目標となっている。HLAの判定が、より詳細なDNA（遺伝子）レベルにまで広がったことから、バンクに登録する患者さん

の九割程度にドナーが見つかるには、三十万人の登録者が必要となったのである。だが、この数年、ドナー登録者数は頭打ちの状況がつづいている。かつて不評的となっていた「登録のしにくさ」などは徐々に改善され、土・日曜やキャンペーン登録、職域登録などによって登録窓口が広くなったにもかかわらず、なのである。どこに原因があるのかは残念ながらよくわかっていない。

ドナー登録者といえば、女優の東ちづるさんもその一人だが、X JAPANのhideさんが登録（一九九六年八月）したのには驚かされた。心ない一部のマスコミから「売名行為」といった的はずれの声も出たが、当時のhideさんは「売名」などは全く必要のないカリスマ的存在であった。hideさんの登録は、骨髄移植を受けた少女との交流がきっかけだったのだ。

hideさんが一九九八年五月に急逝したあと、二人の交流ぶりを『hide』が「がんばらどぞ』（一九九八年九月、小学館刊）にまとめた。その中で「hideさんは自殺ではない」と、私なりにいくつかの根拠を挙げたが、見ず知らずの他人を救うという骨髄バンクの理念自体が、生命をおろそかにするものではないからだ。刊行を縁にhideさんのファンとも話をする機会が増えたのだが、骨髄バンクにドナー登録するファンもかなり多い。

ところで、由希子さんが亡くなった直後の一九九三年一月二十八日、日本骨髄バンクによる初めての骨髄移植が宮城県某の病院でおこなわれた。それ以後、月間の移植例数が少しずつ増えつづけ、二〇〇〇年十一月にはついに三千例の万台を突破した。現在では毎日、全国のどこかで移植が実施されているわけで、世界最大の全米骨髄バンクに並ぶ実績を挙げており、移植例は今後も増えつづけていくはずだ。

国際協力も急速に進展した。日本骨髄バンクは、由希子さんの移植が実現した全米骨髄バンクをはじめ、韓国と台湾の骨髄バンクと提携関係を結んでおり、さらに世界中の骨髄バンク・臍帯血バンク（さいたいじゆ）の登録HLAデータを集積・紹介しているBMDW（Bone Marrow Donors Worldwide 本部・オランダ）にも加盟した。日本国内でドナーが見いだせない場合、海外のバンクで見つかるケースが増えており、日本骨髄バンクの移植例の数パーセントを占めている。

しかし、実際に移植を受けることのできた患者さんは、バンクに登録した人の三分の一にしかすぎない。ドナーとのHLAが適合しなければ移植に漕ぎ着けることはできないのだが、コーディネイトに日数がかかってしまい、ドナーを待っているあいだに病状が悪化するケースも多いのだ。それを解決するため骨髄移植推進財団が対応に

取り組んでいるところだが、何よりも大事なものはドナー登録者の増加なのである。

それに、由希子さんが闘病していたころに比べて、白血病や再生不良性貧血などの血液疾患をめぐる状況がずいぶん変化してきた。白血病の原因は依然として不明なのだが、移植の方法そのものが広がりを見せている。ヘソの緒を活用した臍帯血移植や末梢血幹細胞移植が実用化されたのだ。骨髄移植と合わせて「造血細胞移植」と総称される。臍帯血移植に関しては、日本さい帯血バンクネットワークが一九九九年八月に設立され、もっか全国九カ所の地域バンクが活動しており、実際に地域バンクから提供を受けての移植が進んでいる。造血細胞移植について関心のある方は、二〇〇〇年三月刊の拙著『いのちのバトンリレー〜造血細胞バンクのいま』（ローカス刊、角川書店発売）をご覧いただきたい。

さて、単行本を刊行したころの私は、単なる取材者の立場だったが、一九九六年から四年間、全国骨髄バンク推進連絡協議会の事務局次長を務めたほか、日本さい帯血バンクネットワークの事業評価委員も経験した。連絡協議会は全国各地のボランティア団体が加盟する組織で、ドナー登録へのPR活動などに取り組んでいる。ボランティアの中には患者さん自身や家族も含まれており、そうした人々との交流を通じて、

バンク事業の重要性をさらに確認したものだ。

ボランティア活動を進めているさなかの一九九六年暮れ、同居中の義父が骨髄異形成症候群と診断された。この病気はやがて白血病に移行することが多く、義父もそのとおりの経過をたどって二年後に亡くなった。それまで、時折呼びがかかると講演で「誰がいつなるかわからないのが白血病だから、骨髄バンクは他人事と考えないでいただきたい」と語ってはいたものの、わが身にそれが立ちあらわれるとは正直なところ考えてもいなかった。

由希子さんも、まさか白血病になるとは思ってもいなかった。病気になって初めて、生命のいとおしさを実感し、移植を経て健康を取り戻したら骨髄バンク運動に取り組む決意を固めていた。彼女自身はそれができなくなったのだから、本書を読了して彼女の生き方に共鳴していただけるなら、なんらかの形で骨髄バンクへの協力をお願いできれば幸いである。

二〇〇一年三月



わかれ
21歳の別離

白血病とのたたかいに青春をかけて

遠藤 允

学研M文庫

平成13年 2001年5月19日 初版発行

● 発行者——伊藤年一

発行所——株式会社学研研究社

東京都大田区上池台4-40-5 〒145-8502

印刷・製本——株式会社廣済堂

© Makoto Endō 2001 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

●編集内容に関することは——編集部直通 03-3726-8350

●在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

出版営業部 03-3726-8188

●それ以外のこの本に関することは——

学研お客様相談センター 学研M文庫係へ

文書は、〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15

電話は、03-3726-8124

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書は一九九四年『21歳の別離』のタイトルで学研研究社から出版された作品を文庫化したものです。